

サウジアラビア王室の王位継承と改革

Halper and Associates

本稿は、アブドラー国王逝去の前に執筆された論文を翻訳したのですが、サウジアラビア王室の今後についての参考にご紹介させていただきます。

(2015年1月13日)

トニー・コーデスマン氏によるこの記事には興味深い点がある。サウジアラビアに関する米国の懸念を知る手掛かりを与えてくれるが、必ずしも記事の全文に賛同する必要はない。随所に誇張した表現が見受けられ、いくぶん断定的なところもあるが、サウジアラビアの王室や王位継承、改革のペースに対する米国の懸念を知る手掛かりを与えてくれる記事である。

サウジアラビアの王位継承「危機」の本質

Anthony H. Cordesman

2015年1月9日

サウジアラビア国王が重病に陥ったり、死去したりするたびに、サウジアラビアの王位継承危機をめぐるマスコミの行き過ぎた取材合戦の火ぶたが切って落とされる。王室内の揉め事やサウジアラビアの不安定化、この王国内の多様な緊張関係が市民の危機や衝突を引き起こしかねない実態について、またしてもさまざまな憶測が飛び交っている。アブドラー国王の病気も例外ではない。サウジアラビアに関する記事を書いた者には、すでに国王が死去した場合にどんな事態が起こるの

か、サウジアラビアが重大な政治的危機に陥るのか、王室が自滅するのか、あるいはジハード戦士の過激派によって支配権を奪われるのかなど、問い合わせが殺到している。

こうした懸念の一部は当然のことである。アブドラー国王は非常に優れた統治者として、中東の激動の時代にサウジアラビアを先導してきた。アブドラー国王は1995年にファハド国王が脳卒中で倒れた時に事実上の支配者の役目を任せられ、2005年8月から正式な国王となり、20年近く実権を握ってきた。実権を握るまでは、反米派や超保守派と報じられることもあった国王は、有力な同盟者かつ大改革者として君臨してきた。

アブドラー国王の支配下における発展

部外者は改革のペースにあれこれと言うことができるが、アブドラー国王はサウジアラビア経済の着実な近代化と自由化を統括してきた。教育はいまだに近代的なものとは言えないが、現在のサウジアラビアには近代的な私立大学があり、米国で学ぶ若いサウジアラビア人の数は着実に増えており、女子の中等学校や大学卒業生の数は男子を上回っている。

アブドラー国王は汚職を大幅に減らし、王族の特権を制限してきた。サウジアラビアの国家予算や5ヵ年計画を通じて、経済の多様化やインフラの整備、保健、教育に予算が着実に割り当てられてきた。大半のアラブ世界と違って、サウジア

ラビアは教育や若者のための雇用創出、住宅改善、2011年以後のアラブ世界の著しい不安定の要因となった他の重要な経済及び社会的ニーズなどの分野に多額の投資も行った。

サウジアラビア政府とその安全保障サービスは近代化が着実に進んでおり、あらゆるレベルにおいて米国との密接な関係が維持されている。サウジアラビアの反テロ活動は着実に実効性を高めており、2003年にサウジアラビアがアラビア半島においてアルカイダによって初めてテロの標的にされて以来、米国の緊密なパートナーを務めてきた。米国とサウジアラビアはイランやイラク、シリア、バーレーン、イエメンのイスラム原理主義への最善の対処法について重点的に取り組んできた。

サウジアラビア政府は聖職者の過激な要素を粛々と抑制し、宗教警察の役割を制限し、漸進的な改革に向かって進んできた。漸進的な進展は、サウジアラビア王室がより多くの自由主義者を抑圧する保守的な集団ではなく、技術官僚やビジネスリーダーをはじめとするイブン・サウード国王の時代から保守派の近代化を着実に進めてきたエリート集団の一部であることを反映している。

アブドゥラー国王の指導の下に、サウジアラビアは国家司法制度の重要な側面の近代化を進めてきた。サウジアラビアは「諮問評議会」(マジリス・シューラ)のような立法機関の役割を強化し、2005年と2011年の選挙では実験的な試みをおこなった。アブドゥラー国王は、今年予定されている地方議会選挙において女性に投票する権利と選挙に立候補する権利を認めた。しかし、過去2回の選挙の結果には同族意識や旧守性が色濃く反映され、今後の改革のペースについて慎重論が広がった。

部外者の個人的な印象を述べるならば、湾岸協力会議(GCC)において他の南部アラブ諸国の指導者、ヨルダン及びモロッコとの協力者、エジプトや他のアラブ諸国への支援提供者、さらにアラブ和平計画の支持者としてのサウジアラビアの役

割は1970年代後期からずっと、特に1980～1988年のイラン・イラク戦争中、さらに1990～1991年のクウェートを解放するための湾岸戦争中に、世界経済への安定した石油輸出の流れを保証するうえで重要な世界戦略上の役割を果たしてきた。サウジアラビアは、米国のアフガニスタン及びイラクへの侵攻後にイスラム過激派が台頭した期間や2011年の春に始まった新たな激動の波が押し寄せる期間に、高まるイランの脅威に直面しつつも、地域の安定化に一役買うという点において極めて重要な役割を果たしてきた。

アブドゥラー国王支配下時代と国王亡きあとの課題

サウジアラビアは問題を抱えていない、サウジアラビアは多くの分野において行動を急ぐべきではない、あるいはサウジアラビアは継続的な社会・政治・経済改革を実行する必要がない、などとはとても言えない。女性の役割が大きく変わるの間違いはない。そうなれば、サウジアラビアは女性の才能や技能をより生産的に活用できるようになる。少数派であるシーア派の権利と平等の拡大が必要とされている。サウジアラビアの社会が許す範囲で、教育のより急速な近代化が必要とされている。立法機関や選出された団体の活動範囲や権限の拡充が必要とされている。

国民の支持を維持しつつ、サウジアラビア独自の宗教的及び文化的なニーズを満たし、漸進的な進展が逆行したり、革命へと発展しないように注意しながら、可能な限り早く前進につながる近代化や改革のペースを見極めるという課題に直面するであろう。2011年以降に中東地域の他の国々で起きている出来事を見ても明白なように、事態を間違った方向へと導くのは容易なことだが、正しい方向へと軌道修正するのは極めて難しいことである。

なかでも、サウジアラビア政府は急速に人口が増加するなかで、有意義な仕事や未来がもたらさ

れるようにする必要がある。関連する人口統計学的動向や情報源によって著しく異なる推計データを部外者が真に理解するのは不可能である。しかしながら、米国国勢調査局の推計によれば、サウジアラビアの人口は1950年の386万人から1975年には720万人、2000年には2,130万人、2015年には2,780万人に増加している。さらに、2025年には3,190万人、2050年には4,030万人に増加すると試算している。しかし伸び率で見ると、年間人口増加率は1975年の2.9%から2015年には1.5%に低下しており、2050年には0.7%に低下すると予想されている。

サウジアラビアの進展状況に関していえば、CIA（米国中央情報局）の推計についても留意しなければならない。推計によれば、2015年に約26万1,000人の男性と約24万5,000人の女性、合計で少なくとも50万6,000人が就労年齢に達し、840万人の市場重視型の労働力人口に加わるが、そのうちサウジアラビア人はわずか約170万人である。国内の安定という観点から見れば、これはとてつもない課題を提起している。

サウジアラビアはアブドゥラー国王支配下における「若者の急増」の課題におおむね対処してきたが、石油価格が現在よりもはるかに高かった期間における石油の富は比較的均一だったことにも留意しなければならない。推計に相違はあるものの、CIAと米国エネルギー情報局の推計によれば、サウジアラビアの2013年の1人当たりの国民所得は3万1,300ドルで、1人当たりの石油収入は8,939ドルだった。

これを大局的に見ると、米国の1人当たりの国民所得は5万2,800ドルとなっている。カタールのような紛れもなく石油の豊富な国の2013年の1人当たりの国民所得は10万2,100ドルで、2013年の1人当たりの石油収入は4万943ドルだった。だが、外見적으로는もっと豊かに思えるアラブ首長国連邦(UAE)の2013年の1人当たりの国民所得は2万9,000ドルで、1人当たりの石油収入は9,736ドルに

すぎなかった。

サウジアラビアは、はるかに貧しく気難しい隣国に対処するため、限られた資金を使わざるを得ない。これらの隣国の問題は脅威をもたらす。イランの2013年の1人当たりの国民所得は1万2,800ドルだった。イラクの2013年の1人当たりの国民所得は7,100ドルで、1人当たりの石油収入はわずか2,700ドルだった。1人当たりの石油収入がごく少額のイエメンの1人当たりの国民総所得はわずか2,500ドルだった。サウジアラビアが世界屈指の安全保障支出額を計上している背景には多くの理由がある。サウジアラビアは極めて現実的な脅威にさらされ、また敵に直面している。それらの多くは絶えずテロ行為の脅威をもたらし、イスラムの最重要な聖地の番人としてのサウジアラビアの正当性を脅かす非国家主体である。

王位継承問題が突きつける「脅威」

米国などの諸外国が、サウジアラビアがアブドゥラー国王亡きあとに直面する課題や脅威を危惧するには理由がある。米国とサウジアラビアとの間の緊密かつ永続的な国家安全保障パートナーシップにも理由がある。しかし、たしかに重大な問題ではあるが、王位継承問題は決してそのような懸念事項と同じように不安視するものではない。

第一に、高位の王族の誰がアブドゥラー国王の改革ペースを減速させるのか、米国や他の湾岸協力会議加盟国とのサウジアラビアの安全保障パートナーシップを弱めるのか、もしくはサウジアラビアの政策においてその他の重要かつ後ろ向きな方向転換を図るのかという疑問である。王族の権力争いを話題にするのも悪くはない。確かに、王族の権力争いは極めて現実的である。しかし、米国が独自の党派的な権力争いを繰り返して、4年ごとに政権交代の可能性があることを忘れてはならない。しかしながら、王族の権力争いはサウジアラビアの政策の最重要な部分を占めるものではないように思われる。

異議を申し立てる王族はごく少数で、多くは改革志向が強く、超保守派というわけではない。さらに、ファイサル国王が1962～1964年に高まったナセル主義の影響力をめぐる危機の真ただ中に、能力に欠け、浪費家だったサウード国王からサウジアラビア政府を救済してから、サウジアラビアは深刻な国内政治闘争に直面してない。それは、サウジアラビア政府がまだ比較的脆弱かつ未発達で、国家予算が不当かつ独断的に管理され、自国の治安部隊の忠誠心が不確かで、政府の全般的な継続性が危ぶまれる時期でもあった。現在、こうした状況は払拭され、存在しない。

第二に、サウジアラビアは絶対君主制からは程遠い。サウジアラビアは、主要な王族や大臣など有力な政治家の引き継ぎを手をこまねいて待つようなことはせず、事実上あらゆる問題を討議して決めている。その際、かなり諮問評議会やマスコミの手を借りている。サウジアラビアは民主主義国ではないが、出自と同程度に個人的業績が権力の座につく鍵を握っている。さらに、事実上あらゆる問題が国内で討議され、ある程度合意に基づいて解決が図られる。国王選びは極めて重要であるが、サウジアラビアの他の上級指導者についても同じことが言える。

第三に、サウジアラビア政府は大規模かつ安定した組織を有している。政府内の有力者の数を計る正確な方法は存在しないが、およそ33～35人の重要な大臣などの上級職が存在する。合計11席を王族が占め、イブン・サウード国王の孫世代である高位の王子たちが8席を占めている。およそ23人が技術官僚である。彼らは王位継承時に権力の継続性を維持するうえで極めて重要な役割を果たし、ほとんどが王位継承の成り行きに関係なく現職にとどまることになる。

第四に、アブドゥラー国王は2014年12月7日に内閣の7席の重要なポストを入れ替える形で、自らの王位継承の準備を済ませた。これらの要職のなかには、文化、電気通信、運輸、農業大臣が含

まれ、継続性と新たなレベルの活力や行動力を提供できる若手の大臣が任命された。アブドゥラー国王は、アブドゥラー・イブン・サレ・ビンオバイド閣下の後任としてファイサル・ビン・アブドゥラー・ムハメド・アル・サウード王子を新しい教育大臣に任命し、女性のフーラ・ファエズ氏を新しい女性教育問題担当副大臣のポストに任命した。アブドゥラー国王は、アブドゥラー・アルラビーア氏を新しい保健大臣に任命し、モハメド・イブン・アブドゥル・カリーム・アルイッサ氏を新しい司法大臣に任命した。

また、アブドゥラー国王はムハマド・アルジャーセル氏をサウジアラビアの中央銀行に相当するサウジアラビア通貨庁（SAMA）総裁に任命した。サウジアラビア通貨庁は、国の経済を管理し、発展させる政府の取り組みの極めて重要な部分を担う。アブドゥラー国王は、ムハマド・アルワハブ氏の血縁のイスラム問題担当大臣のシェイク・サレ・ビン・アブドゥルアジズ・アル・アシャイク氏の後任としてアル・シャイク家の親族以外の新しい大臣を任命した。これらの任命はすべて、既存プログラムの継続性を維持するだけにとどまらず、サウジアラビアの近代化のペースを加速させることが目的と思われる。

このような状況を踏まえて、実際の一連の継承に注目するべきである。アブドゥラー国王は現在の病状から多分回復されるであろう。しかしながら、アブドゥラー国王は90歳を超えており、次世代の高位の王子を王位に就かせるという問題に比べれば、次期国王選びの重要性ははるかに低くなっている地点にまでサウジアラビアは達しつつある。近代サウジアラビアの創設者であるイブン・サウードの子孫はみなこうした転換を避けられない年齢に達しつつある。アブドゥラー国王はすでに二人の王位継承権のある皇太子を亡くし、現在の王位継承権を有するサルマン・ビン・アブドゥル・アジーズ・アル・サウード皇太子—副首相兼国防大臣も務めている—は少なくとも78歳に達し

ており、病の床に伏している。

サルマン皇太子の病状をめぐる報道はまちまちである。そして、サウジアラビア王族の病気に関する医療報告書は甚だしく不正確である。しかしながら、アブドゥラー国王は2014年3月にムクリン・ビン・アブドゥルアズィーズ王子を王位継承権のある副皇太子の新しい地位に任命した。それに先立ち、2014年2月に同王子を副首相に任命していた。ムクリン王子はアブドゥラー国王自身と国王の近代化や改革とも密接なつながりを持ち、1945年生まれのムクリン王子は存命する最も若いイブン・サウードの息子である。

アブドゥラー国王は、2014年中に数々のサウジアラビアの治安に関する要職の人事も行い、サルマン皇太子の病状がサウジアラビアの安全保障に影響を与える可能性は低いと思われる。サウード・アルファイサル・ビン・アブドゥル・アジーズ王子は外務大臣を務めており、サウジアラビアの外交政策や数十年にわたる対米国パートナーシップの構築において重要な役割を果たしてきた。サルマン皇太子の息子のモハメド・ビン・サルマーン氏は国務担当大臣と王室裁判所長官を務めており、さらに防衛政策において重要な役割を果たしていると報道され、国防大臣を務めている。アブドゥラー国王の息子のミティブ・ビン・アブドラ・ビン・アブドゥル・アジーズ・アル・サウード王子は現在国家警備担当大臣を務めている。ムハメド・ビン・ナイフ・ビン・アブドゥル・アジーズ・アル・サウード王子は内務大臣を務めている。カレド・ビン・バンダル・ビン・アブドゥル・アジーズ・アル・サウード王子はサウジアラビア総合情報庁の長官を務めている。これは強力かつ実績のある国家安全保障チームであり、米国と緊密に連携を取り合っている。

王位継承の進め方については未知数である。サウジアラビアの中にはムクリン王子の指導的役割や出自を疑問視する向きもある。もしアブドゥラー国王が死去し、サルマン皇太子が王室の他の

高位の王族の支持を得た場合、サルマン皇太子が別の王位継承権を与えられた皇太子を任命する可能性が考えられる。想定される候補の一人—重要なステイラー族の別のメンバー—は1942年生まれの元内務大臣のアハメド・ビン・アブドゥル・アジーズ王子である。しかしながら、報道によれば、同王子は内務大臣をわずか数ヶ月務めた後でリーダーとしての資質を疑われ、2012年にアブドゥラー国王に解任されたという王子でもある。

同時に、アブドゥラー国王が王位継承者選びを行うため新たに設置した組織である「忠誠委員会」も重要な役割を果たす可能性がある。その最大の理由は、忠誠委員会の機能の一つが、病気に陥り、職務遂行が不可能になった場合に国王を交代させることだからである。しかし、正式な制度とはいえ、湾岸地域の君主国は存命中の国王を交代させることに消極的であり、ファハド国王が病気に陥り、健康面で不安があるなかアブドゥラー皇太子が何年間も事実上の統治者を務めたことを忘れてはならない。

しかしながら、これらの不確実性は2016年の米国大統領選挙に生じる不確実性と決して同じものではない。世界中のあらゆる国と同様、サウジアラビアは大きな国内外の課題に直面しており、将来を予測することが不可能な多くの分野を抱え、考えられるシナリオとして何らかの悲惨な最悪の状況を常に想定している。しかしながら、王位継承危機が進むにつれ、次期サウジアラビア国王選びは、いずれは危機ではなくなる可能性が高い。サウジアラビアはイブン・サウード国王を権力の座に押し上げた闘争から著しい発展を遂げてきた。現在、同国はほとんどの判断基準において近代国家であり、興味深くもあり不透明な同国の王族の権力争いが深刻な不安定性をもたらす由々しき誘因となったり、同国の戦略的役割や対米国パートナーシップの重大な方向転換を招いたりする可能性は低いように思われる。